

開学早々、未だ固まらざる蒼惶の中に、紀要第一号を世におくことになつた。

西日本に芸術短大として、各方面の期待と大きな夢を抱いて出発した本大学の教官各位の労作である。

日本の文化、殊にこうした芸術文化が極端に都市集中の傾向がみられる中に、この九州の一角に、埋れた地方文化の昇揚と、西日本芸術センターをめざして門出したこの大学の使命は、まことに大きいが、また、それだけに路もけわしいことを覚悟している。

新興芸術大学として、健康で而も独創的な意慾を本大学の生命として、若い人々を世に送らなければならない。

伝統はないが、しかし旧来の因習にとらわれざる若き大学の翼を期待して欲しい。

足 達 益 三